

「幼保小の連携」において、 音楽指導に求められる今日的課題及び実践的試論

水野伸子

文化創造学部文化創造学科幼児文化専攻非常勤講師

(2005年11月8日受理)

A Practical Study of Today's Music Education on the Cooperation between Kindergartens and Elementary Schools

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

MIZUNO Nobuko

(Received November 8, 2005)

〔要旨〕

「幼保小の連携」において、保育者・小学校教員に求められている今日的課題は「子どもの連続的な発達を相互理解する」ことにあり、特に幼児期の発達は体験と結びついた理解が求められる。幼児は、心身が躍動した「楽しい体験」の中で自発的に様々な能力を獲得していくものである。本研究では、幼児がいつ、どのような音楽的要素を、どのようにして培っていくのかを明らかにすることを目的とした。そこで「楽しい音楽体験の内容」と「培われると予想される音楽的要素」について、まず保育者から調査をし、次に、実際に子ども達と音楽遊び「わいわいコンサート」を行い、その中で生じる子ども達の表情や行動の変化から、内面の変化を推察し、3・4・5歳児その時々培われていく音楽的要素を考察した。

問題の所在と研究の目的

1. 「幼保小の連携」における現状と課題

幼小連携の必要性は、平成10年に告示された小学校学習指導要領や、幼稚園教育要領からすでに明文化された教育課題として読みとることができる⁽¹⁾⁽²⁾。さらに、平成13年3月29日に策定された文部科学大臣による『幼児教育振興プログラム』では、より具体的に提言されている。「幼稚園教育と小学校教育との間で円滑な移行や接続を図る観点に立って、幼稚園と小学校の連携を推進する」。このように行政レベルでは、幼小連携がすでに

自明のこととなっており、最近では、幼児教育に関わる研究者等からも活発な議論がかわされたり⁽³⁾⁽⁴⁾、保育学会や日本音楽教育実践学会等でもとりあげられたりしている。また、秋田(2002)は、具体的な推進策についても「共通の課題を設定した合同研究、幼稚園教育要領の相互学習、保育授業への相互参加、校長・園長等指導的立場にある者に対する意識啓発研修などの必要性等」と提案している⁽⁵⁾。

しかし、実際は幼稚園の餅つき大会に小学一年生を招待したり、小学校の運動会へ年長児が参加したり、といった行事の際の交流に

とどまっているのが現状ではないだろうか。山口(2003)は、連携にまで至らないその根本原因を教員の意識から探ろうとした。幼稚園・小学校教員による意見調査を行い、その結果、「幼稚園において、できることはすべて達成しようとする幼稚園教員の姿と、幼稚園までの学び・活動は考慮に入れず、一から積みかさねていこうとする小学校教員の姿」が浮かび上がり、「幼稚園から小学校教育への連続的な子どもの発達」が、教員に十分に配慮されていないという状況が確認できたと述べている⁽⁶⁾。この「連続的な子どもの発達への理解」は、子どもの心身の発達段階に応じた教育という原点に立ち戻った観点からも、幼小一貫の指導計画作成の根拠になるという意味においても、最重要視される問題と考える。

このように、幼保小の連携を推進していくためには、まず「保育者・小学校教員が、連続的な子どもの発達を相互理解する」ことが求められている。

2. 音楽指導の場において

子どもの発達についての理解は、幼児教育の音楽指導の場においても問題となっている。門松(2005)は「保育現場で表現(音楽)を指導するにあたって一番の問題は、幼児の発達に合わせて、何をいつ、どのように指導するか、ということがはっきりしないことである。」⁽⁷⁾と指摘している。保育の現場でこのような混乱が生じている原因の一つに、「幼児の音楽的発達の道筋が、体験と関連させて明らかになっていない」ことが考えられる。音楽的発達についての先行研究には、代表的なものにキース・スワンウィック⁽⁸⁾やD. J. ハーグリーブス⁽⁹⁾のものがあるが、体験の中でどのように獲得していくのかについては不明瞭である。さらに、幼稚園教育要領の「表

現」には年齢ごとの記述がなく、保育所保育指針には、4歳児のものと5歳児のそれが全く同じ内容となっている箇所があり、概略を示すにとどめたものとなっている。

そこで、本研究では、幼児(3・4・5歳児)がいつ、どのような音楽的要素を、どのようにして培っていくのか、という連続的な音楽的発達の内容を、体験と関連させて僅かでも明らかにすることを目的とする。

研究の方法

幼児は、楽しい体験の中で自発的に様々な能力を獲得していくものである。何故なら、幼児にとって楽しい体験とは、心身が躍動し、知恵や気力などが活性化された状態だからである。西原(1995)も、「幼児が、今何かを見いだして熱中する。それが発達のいわば原動力であろう。能力の発達は、体験のあとについて現れる」と述べている⁽¹⁰⁾。つまり、幼児の音楽的発達を明らかにするには、幼児が楽しいと感じる音楽体験の内容を把握し、そこで培っていく音楽的要素の一つひとつ解釈していくことにあると考える。このように体験から発達を読みとる手法について、津守(1980)は、子どもの発達を外部から観察できる行動の変化としてのみとらえるのではなく、それを手がかりにして「内面の変化」からとらえることを提案している⁽¹¹⁾。つまり、楽しい音楽体験の中で生じる子ども達の表情や行動の変化を手がかりにして、内面の変化を推察し、そこから発達をとらえようとするものである。

そこで、「楽しい音楽体験の内容」と「培われる音楽的要素」について、客観性を高めるために、まず保育者から全体的な調査をし(調査1)、次に、実際に子ども達と音楽遊び「わいわいコンサート」を行い、その中で生じる子ども達の表情や行動の変化から、内

面の変化を推察し(調査2), 3・4・5歳児その時々によって培われていく音楽的要素を考察する。それによって、「調査1」の結果をより確かなものにしたい。

調査1

調査期日 2004年7月9日

調査場所 長良川会館

調査対象

保育士研修会(岐阜県健康福祉環境部児童家庭課主催)に参加した岐阜県内の保育者49名(全員,勤務園が異なる)

設問1

「幼児にとって、楽しい音楽活動とは、どのような内容でしょうか」

設問2

「そこでは、音楽に関するどのようなことを、子ども達はつかんでいくのでしょうか」

3・4・5歳児それぞれに対する回答を求めた(自由記述方式,複数回答)。自由記述方式を採用したのは、保育者の率直な思いを知りたかったからである。

調査2

観察期日 2004年12月21日

観察園 ふたば保育園(愛知県一宮市)

対象児 3歳児・4歳児・5歳児

方法 筆者が日頃、保育園や幼稚園で行っている音楽遊び「わいわいコンサート」を、3歳児以下のグループと4・5歳児のグループに分けてほぼ同じ内容で行い、それをビデオ録画し、終了後ビデオを見ながらフィールドノートを作成する。その記録と、実験者である筆者の解釈から培われていく音楽的要素を考察する。

結果と考察

1. 「調査1」保育者アンケートから

「調査1」では、保育者が指導経験のない年齢児についてのみ無回答の項目もあったが、すべての保育者から回答を得た。その内訳は、表1に示すとおりである。ほぼ半数の保育者が設問1のみに答え、設問1と設問2の両方に回答をした保育者は、約30%であった。このことから、保育者が日頃、子ども達をよく観察している様子を伺うことができるが、体験と発達との関わりについて、どのようにとらえているかは、これだけの設問からは判断できない。このことは今後の課題として残される。

表1. 保育士から得た回答, 設問1・2による分類
(左:度数 右:49名を分母とする場合)

	設問1のみ 回答	設問2のみ 回答	設問1・2ともに 回答
3歳児	29名(59%)	0名(0%)	16名(33%)
4歳児	23名(47%)	0名(0%)	15名(31%)
5歳児	24名(49%)	0名(0%)	16名(33%)

設問1では「楽しい音楽体験の内容」を設問2では「そこで培われると予想される音楽的要素」について問い、音楽的要素ごとに分類すると回答結果は以下ようになった。度数, % (それぞれ, 回答を得た事例の総数を分母とする)を示す。

【3歳児】

・音や歌詞のイメージを、身体で表現して具体化する

設 1	チューリップの歌は、手でお花を作り、小鳥の歌は、腕を伸ばし羽のようにパタパタさせて歌っていた。 (36件46%)
設 2	身体を動かして表現することは、おもしろいなと感じる。 (7件35%)

・音そのものに興味を持つ

設1	色々な音にびっくりしたり、壁や室内遊具をたたいて音を出したりして遊んでいた。 (20件26%)
設2	まず、「きれいな音」と感じられる心が育つ。 (5件25%)

・拍・リズム・メロディを感得する

設1	簡単な童謡などを、思い思いに、声に出すことを楽しむ。 (22件28%)
設2	歌に対して、心地良さとリズムを感じる。 (6件30%)

また、これらの活動は、保育者と一対一の関係の中で行われるのが望ましいと述べていた。

設2	保育士と一人一人の子どもの関係の中で、「歌うことって楽しい」、「曲に合わせて身体を動かすことって楽しい」、「楽器を鳴らすことって楽しい」と感じること。
----	---

【4歳児】

・友達と共感しながら演奏する

設1	年少児までは、バラバラに楽器を鳴らして楽しんでいた子も、友達と一緒に、歌ったり踊ったりしている。 (16件27%)
設2	周りの存在に気づき始め、友達と一緒に音楽することが楽しい。 (4件22%)

・リズムや、音楽の雰囲気や身体で表現する

設1	動きも速くなり、小刻みになったり、場所を移動しながら踊ったり歌ったりしている。 (14件23%)
設2	曲に合わせて踊ることは、楽しい。 (4件22%)

・音色・音程の違いに興味を持つ

設1	缶や箱などで楽器を作り、曲に合わせて、自由に叩いて音を試し、「がらくた演奏会」を楽しんでいた。 様々な楽器に触れて、音を出そうとし、音色や音程の違いにも、興味が出てきている。 (13件22%)
設2	いろいろな楽器の音色を感じる。 (3件17%)

・西洋的なメロディやリズムを感得する

設1	流行の曲を、とりいれると喜ぶ。 CMソングが好きで、歌いながら、真似している姿が目立つ。 (9件15%)
設2	複雑なリズムがわかってくる。 (3件17%)

・歌詞やメロディからイメージを感受する

設1	歌詞にストーリー性のあるものを好み、ごっこ遊びに発展する。 元気な曲、静かな曲など、歌のイメージがわかってきて、そのように、歌おうとしている。 (6件10%)
設2	メロディの表現する感性(楽しさ・美しさ・寂しさ・悲しさ)。 (2件11%)

急速に音楽的な能力が高まっていく様子に、次のような表現も見られた。

設1	4歳児は、「音楽が身についていく時期」なのかな、と感じる。
----	-------------------------------

【5歳児】

・アンサンブルする時に、音をそろえようとしたり、合わせようとしたりする

設1	みんなで歌う時に「自分だけ怒鳴って歌ったりすることがどういうことか」がわかった上で、友達と一緒に気持ちをそろえて歌う楽しさを知る。 (20件37%)
設2	リズムに合わせて、自分の出番のところでしっかり音が出せる。 みんなで歌ったり、合奏したりして、一つの音楽を作り上げる喜びを知る。(10件48%)

・音に対する科学的興味が芽生える

設1	音の出るものを自分達で探してきて、「どうしたら鳴るか」音程を変えることができるかどうか」考えながら作っていた。 (11件20%)
設2	身近なものや、打楽器などの音の面白さを感じる。 (2件10%)

・リズムを身体で感じて表現する

設1	アニメの曲などを、身体表現しながら歌っている。 (9件17%)
設2	リズムを、身体全体で感じとる。 (1件5%)

・自分なりに表現の工夫をする

設1	音楽を聞いて、自分なりに動きを考えて、身体を動かす。 (5件9%)
設2	歌に、強弱をつけたり、優しく歌ったりする。 (3件14%)

・イメージーションが膨らむ

設1	歌ったり踊ったりするだけでなく、その中で、物語を作って演じるようになる。 (5件9%)
設2	美しい歌・楽しい歌・寂しい歌など理解し、感情込めて歌える。 (2件10%)

以上の様子が、5歳児に関する記述から認められた。

2. 「調査2」事例分析

「調査2」では、「わいわいコンサート」を保育園で実際に行い、その中で子ども達が楽しんでいられる場面を抽出し、撮影ビデオからフィールドノートを作成した。そこで「培われていくと予想される音楽的要素」についての分析を試みた。

〔分析の視点〕

1. 子ども達は、どのような発言をし、表情や行動はどのように変化していくか。何人かを抽出し、可能な限りその変化を追う。

2. 上記1.の変化は、音楽的な何がきっかけになって起きるのか

3. その年齢だけに見られる特徴は何か。

以上の視点から分析を行った。3・4・5歳児それぞれに、特徴的な事例を以下に示す。

【3歳児】

3歳児は、音楽を加速したり、拍の刻みを細かくしたりすると、顔や身体を左右に激しく揺らしたり、笑い出したりする様子が特徴的に見られた(事例1)。このような反応から、3歳児は、「速さ」の持っている味わいや雰囲気といったものを、まず身体で感じている様子が推測できる。4・5歳児からは、そのような反応は見られず、速さの中身、つまりテンポやリズムの違いに強い関心が向けられていた。

この事例1の他に、ピアノに合わせて歩いたり走ったりする場面では、刻みの細かい音楽に変えると「キヤー」と黄色い歓声をあげながら、走り出す姿が観察でき、これも4・5歳児には見られない光景であった。同じように「速さ」の雰囲気を身体で感じて表していると推察できる。

また、一つの行動を終えるとすぐ確かめるように実験者を見ていたことから、まだ大人との一対一の関係が基本にあることがわかる。

事例1 3歳児 「速さ」の雰囲気を身体で表現する

実験者	A児(男)	B児(女)	C児(男)	D児(男)	E児(女)	F児(男)
「ジョママジョ、 ジョママジョ、 ジョママジョ、 パン(手拍子)」 と唱えながら、 「ジョ」は右手 で右膝を、「マ」 は左手で左膝を たたく。(1回目)	手首から先だけ 動かして、リズム ム打ちをする。	口で「ジョ マ マ ジョ」と唱えなが ら、実験者を真似 ている。	左手の親指を口に くわえたまま、右 手だけ動かして、 膝打ちをしている。	交互に腕を高く 上げて膝打ちし ている。	口で「ジョママ ジョ」と唱えな がら、実験者を 真似ている。	実験者を見て、 左右交互に膝打 ちしている。
少し速く行う (2回目)	腕を上下させて 動かし、実験者 を見ながら、速 さを合わせよう としている。	口で唱えながら、 実験者に合わせ て速くしている。	指を口にくわえ たまま、右手だけ で膝打ちをし、首を 上下に振っている。	口で唱えなが ら、実験者に合 わせて、速くし ている。	実験者の方を伸 び上げるように 見ながら、膝打 ちを速くしてい る。だんだん笑 顔になる	口で唱えなが ら、実験者に合 わせて、速くし ている。
もっと速く (3回目)	実験者から目を 離し、膝打ちを する自分の手 を見ながら、だ んだん加速して いく。	だんだん加速し ていき、片手交互 打ちから両手打 ちに変える。口で唱 えていたのを止め 、笑い出す。	指を口にくわえ たまま、右手だけ で行う。	顔を左右に揺ら して、膝打ちを する。	顔や身体を左右 に激しく振りな がら、交互に膝 打ちをする。	笑いながら行 う。
小さな声で唱 え、指先でやさ しく、ゆっくり 膝打ちをする。 (4回目)	手首から先だけ 動かす。友達 の様子を見回し たり、自分の手 を見たりしなが ら行う。 最後の手拍子 を入れる。	口で唱えなが ら、実験者に合 わせて、指先で打 つ。	指を口にくわえ たまま、右指先 だけで、手前と向 こうを交互に膝 打ちをしている。	実験者の方を見 ながら合わせ て、腕を高く持 ち上げ動作を大 きく、ゆっくり 膝打ちをしてい る。	実験者の方をく いいたるに見 ながら、右手の 人差し指だけで 膝打ちをしてい る。	実験者の方を見 ながら合わせて いる。
少し速く (5回目)	腕を上下させて 動かし、実験者 を見て、速さを 合わせようとし ている。	口で唱えなが ら、膝打ちを自分 から加速させて いる。	指を口にくわえ たまま、右手だけ で行う。	顔を左右に激し く振って、交互 に膝打ちをする。 する。	顔を左右に振り 始める。	顔を左右に激し く振って、交互 ながら行う。
もっと速く (6回目)	腕を上下させ て、友達の様子 を見回しながら 行う。	口では唱えず、実 験者を見て、速く 打つことに一生懸 命な様子	指を口から離し、 実験者を見なが ら、両手で交互打 ちをする。	顔を左右に振っ て、交互に膝打 ちをする。	友達を見なが ら、速く打つこ とに一生懸命な 様子	顔を左右に激し く振って、交互 に膝打ちをする。 する。

【4歳児】

4歳児は、音楽から受けるイメージを友達と共有することによって、よりイメージネーション豊かに音楽を感受する様子が特徴的に見られた。(事例2)。同じ場面で、3歳児と一緒に参加していた2歳児からは「怖い、怖い」と泣き出す子もいたが、4歳児からは「本当に恐かった」とつぶやく声が聞こえ、この言葉からも、イメージの中で遊んでいる様子が裏付けられる。ここでは、緊迫した音楽(A)と穏やかな音楽(B)とを、交互に弾いたの

だが、それぞれのイメージをとらえるだけでなく、組み合わせに、ドキドキしてホッとするといった「緊張と安心」や、「期待と発散」といった音楽の波を感じとって表現する様子も認められた(事例2下線)。

この事例2の他に、音楽の強弱に合わせて、立ったりしゃがんだりしながら歩く場面では、友達と並んで、手をつないだり電車のように連なったりする様子が観察でき、同じように友達とイメージを共有することによって、さらにイメージネーションを膨らませ、

事例2 4歳児 音楽から受けるイメージを、友達と共有する

実験者の言葉かけ及び音楽	A児(女)	B児(男)	C児(男)	D児(女)
「...大きな魚の絵を、そっと歩いて見に行くことにしました。みんなも一緒についてきてくれる？」 フィンガーシンバルをそっと鳴らす。	音に合わせて、そっと足を上げ(イメージ・緊張)、踏み出している。	手でズボンをつかみながら(緊張)、そっと音を聞いてから、足を踏み出している。	音に合わせて、そっと足を上げ(イメージ・緊張)、実験者見ながら踏み出している。	音に合わせて歩いている。
「魚が僕の方を見ているみたい。走って逃げていこう。」 フィンガーシンバルを、小刻みに鳴らす	どう動いていいかわからない様子で、周りの子を見ながら、横向きにカニ歩きをしている。 B児・C児に近づき、同じように手をたたいて喜ぶ(共感・安心)。	実験者を振り返りながらも小走りに走って逃げていく。途中から二人で手をつないで(共感)逃げる。 顔を見合わせて「おもしろかった!」というように、手をたたいて喜び合う(共感)。		走って逃げた後、友達 の肩にしがみつき、顔だけ実験者の方を向いて、怖がっている(イメージ) 。
「今度はピアノに合わせて歩いてきてね」 音楽A: 飛翔/シューマンより(ピアノ)	音楽に合わせてひざを深く屈伸させ、吸い寄せられるような表情で、静かに(イメージ・緊張)、歩いている。 ピアノを弾く実験者を見ている。	三人で手をつないで歩く(共感) つないだ両手をしっかり握り(共感)、笑顔で、音楽に合わせて膝を深く屈伸させて歩く。 時々、C児を笑顔で見る。(共感)	口 に手を入れながら、普通に歩いている。周りの子達の様々な反応を見て、笑顔になる。	「しーっ!」と口 に指を当てながら(イメージ・緊張)、そっと大腿で歩いている。
音楽の雰囲気を変える。 「さあ、逃げるよ」 音楽B: 飛翔/シューマンより(ピアノ)	つないだ手を離して、一目散に部屋の角まで走って(イメージ・発散)逃げる。	年長児の一部がくずれるように、後ろを向いて走り出したのに気づいて、走り始める。	A児・B児より早く飛び出し、前の友達を 押すように(イメージ・発散)して、走って逃げていく。	友達 の背につかまりながら、小走りに(イメージ)逃げる
音楽A: 飛翔/シューマンより(ピアノ)	三人で手をつないで歩く(共感) B児の方を見ながら(共感)歩いている	つないだ手を低く下げ、時々、A児と顔を見合わせながら(共感)歩いている。	始終、笑顔で、実験者の方を向いて歩いている。音楽Aのピアノの音が止んだ時、「しっ!」と口 に指を当て、ピアノを弾く実験者をのぞき込む。(期待)	友達 を手で押しのけながら、大腿で前へ歩いている
音楽B: 飛翔/シューマンより(ピアノ)	音楽を聞くや否や、つないでいた手を離し、くると後ろを向いて、走って逃げる。その後、B児・C児と、手をつないで喜び合う(共感・安心)。	走って逃げた後、C児 に近寄って行き、手を握り、喜び合う(共感・安心) 。	走って逃げ、友達 の中に隠れる(イメージ・発散) 。その後、出てきてB児 に近づき喜び合う(共感・安心) 。	友達 の背を押しながら走って逃げる。その後肩を上げ、口に両手を当て「こわかったー」と言う(イメージ) 。

表情豊かに音楽を感じとっている様子が認められた。

【5歳児】

5歳児からは、音程や音色の違いに興味を持ち、「何でだろう」とその原因を考えるうちに、発音の仕組みや音程・音色の操作等に

気づいていく様子が特徴的に見られた(事例3)。それらは、実験者との一対一の関係に加え、友達とのやり取りの中で一層お互いの考えを深め合っていた。

事例1・2・3 以外の場面からも、いくつか特徴的な反応を以下に示す。

例えば、実験者が先に歌い、それを子ども達が真似して歌い返す(模唱)という形で続いていく歌の場面で、3歳児は唇を震わせて出す声や破裂音のみを何度も真似して、そこから声のおもしろさに関心を寄せている様子が認められたのだが、4・5歳児からは音程やリズムを正確に真似して歌い返す様子が確認でき、基礎的な音楽要素が身につけてきていることがわかる(事例4)。また絵描き歌を歌う場面で、3歳児は出来上がっていく絵の方に強く関心を寄せていたが、4・5歳児の多くは実験者の歌を真似して歌っており、リズムやメロディといった音楽要素を感得して再生する確かな力が身につけてきていることがわかる。(事例5)。

まとめ

幼児にとって楽しい体験とは、心身が躍動し、知恵や気力などが活性化された状態である。だからこそ、その中で様々な能力を獲得していくのである。この発達のいわば原動力となる「楽しい体験」を「調査1」では保育者の視点から、「調査2」では実験者である筆者の視点からとらえ、そこで培われていく音楽的要素について推察した。その結果、「調査1」からは子ども達が体験の中で、音楽的要素の一つひとつ培っていく様子が認められた。「調査2」では、実際の音楽活動の場面において、3・4・5歳児それぞれに特徴的な反応が見られ、その時々培われていく音楽的要素があることが認められた。つまり、幼児は、適切な時期に、適切な音楽的要素を、体験の中で培っていくことが確認できた。培われていく音楽的要素を年齢ごとにまとめてみると、以下ようになる。

【3歳児】

- ・音の雰囲気や歌詞の内容を身体で表現し

て、身体感覚を活発に働かせることにより、イメージを具体化したり、拍・リズム・メロディなどの基礎的な要素を感得したりする。

- ・それらは大人との一対一の関係を基本にして培われる。

【4歳児】

- ・音程やリズム等の基礎的な音楽要素に敏感に反応し、西洋的なリズム・メロディなど流行の音楽にも関心をもち始める。
- ・音楽にイメージをもったり、イメージーションを膨らませたりして、表情豊かに音楽を感受する。
- ・音楽のもつ波(緊張と発散・期待と安心)を感受し、表情豊かに表現する。
- ・それらは友達と共感し合う中で培われる。

【5歳児】

- ・音をそろえたり、合わせたりといったアンサンブルの能力が高まる。
- ・音楽をイメージーション豊かに感じ、それを自分なりに表現しようと工夫する。
- ・音程や音色の違いに強い関心を持ち、その原因を探ろうとして、結果的に音程や音色の操作・発音の仕組み・響きの構造等に気づいていくなど、音への興味が科学的な広がりを見せる。
- ・それらは友達との交流の中で高まる。

事例3 5歳児 音程や音色の違いに興味を持ち、発音の仕組みを探ろうとする

場面、及び実験者の問いかけ	年長児の反応(発言等)
手作り楽器「レインスティック」で音を出す	すぐさま、「(その中に)何が入ってるの?」と質問する。
手作り楽器「紙筒トロンボーン」を鳴らす	「 <u>どうやって、やって(鳴らして)るの?</u> 」「 <u>穴あいてるんでしょ。知ってるよ!</u> 」
<p>コンサート後、使った楽器を紹介する。 手作り楽器 レインスティック を見せて 「中に何か入っているよ、と言っていたよね。何が入っているのでしょうか?」 「中は、こんなふうになっています。」と言って、中が見えるようにペットボトルで作った楽器を見せる。 「つまようじを外側から刺して、中に細かく切ったつまようじを入れると……。〔作り方を説明する〕</p> <p>作り方を説明しながら 紙の筒で作ったものと、ペットボトルで作ったものを交互に何度も鳴らす。</p> <p>「いいこと言うねー。音、違うよね。みんなもお外で歌うのと、お風呂で歌うのとでは、どちらがいい声?」 「場所によって、同じ人でも声が違って聞こえるのですね。同じつまようじ君でも、紙の筒の中とペットボトルの中では音が違うね……。」2つの楽器を、それぞれ鳴らす。</p>	<p>「どんぐり?」「ピーピー玉?」「ピース?」</p> <p>「つまようじー?」多くの子ども達が中をのぞき込み、げげんな様子で尋ねる。 実験者をじっと見つめ、うなずきながら話を聞いている。 「<u>どうやって(つまようじを外側から)、刺したの?</u>」 「(細かく切ったつまようじを)<u>どうやって(中に)、入れたの?</u>」</p> <p>全員が顔をあげ、楽器を見ている。 子ども達の大多数が身動きせずじっと見つめて音を聴いている。 音がすると、「わあっ!」と喜んでいる。 「<u>でも、音が違うよ!</u>」他の子どももうなづいて、その返事を聞こうと、皆が実験者の方を向く。 「お風呂!」「お風呂だと、ずーっと歌ってる!」</p>

事例4 声のおもしろさに関心を寄せる3歳児、音程・リズムに関心を寄せる4・5歳児

3歳児の大多数は、実験者が歌うのを見ているだけで、模唱しない。しかし実験者が、唇を震わせて声を出したり、破裂音を出したりすると、その部分だけを何度も繰り返して真似をしていた。4・5歳児のグループでは、子ども達が模唱して歌う声がだんだん大きくなり、高い声域のメロディも、最後にハモるように合わせたメロディまでも、正確に歌い返していた。

事例5 絵描き歌の絵の方に関心を寄せる3歳児、歌にも関心を寄せる4・5歳児

3歳児の多くが、実験者の描く絵を見つめていたり、真似して空に描いていたりしていた。4・5歳児からは、実験者の歌う絵描き歌を模唱しており、その歌声がだんだん大きくなっていった。

外面に現れる演奏は、内面の充実があつてこそ確かなものとなる。音楽的発達を、演奏の出来具合や技術的側面からのみでなく、音楽体験の中で生じる子ども達の表情や行動の変化を手がかりにして内面の変化でとらえようとする津守(1980)の観点は、音楽の本質的な意味においても重要であることがわかった。

本研究では、幼児期の音楽的発達の道筋を体験の中で明らかにすることを試みた。このことは、保育現場での実際の音楽指導に結びついていくだけでなく、本論の目的であった幼保小の連携を推進していくための課題「保育者・小学校教員による、連続的な子どもの発達の理解」を深める一助になると考える。

幼児期の豊かな音楽的発達を土台にして、小学校の音楽教育が展開し、実っていくのである。したがって、幼児期への深い理解は、保育者・小学校教員の音楽指導の基盤を作る上で重要視されるべきものであり、またその理解があつてこそ、幼小一貫の指導計画や交流授業といった幼保小の連携に関する活動も、真の意味において成果をもたらすものになると考える。

幼児期の音楽的発達が、6歳以降の発達にどのように寄与していくかは、今後の課題として残される。

おわりに

今回の研究で幼児期の音楽的発達の大まかな道筋が明らかになった。しかし、「わいわいコンサート」の中で、子ども達が示す音楽的興味の度合いは、一人ひとり異なっていた。つまり、音楽のどの部分を楽しいと感じ、どのような音楽的要素を培っていくかということは、1人ひとり違っているのである。ここに、「発達のでこぼこ」ができる。しかし、この「でこぼこ」こそが、一人ひとりの「かけ

がえのなさ」につながるものといえるのではないだろうか。

音楽表現とは、「感じた想いを、自分の言葉(音楽言語)で語ること」と考える。つまり、音楽を表現することは、かけがえのない自分を表現することであり、この「かけがえのなさ」は、幼児期の楽しい体験から育まれる。

1人ひとりの「かけがえのなさ」を保障し認め、伸ばしていく。幼稚園や保育園は、そういうところでありたい。そのために、「楽しい体験」から「発達」をとらえる目や、個々の「発達」を見通して「楽しい体験」を仕組む環境構成力の育成が、保育者養成校の表現教育に求められよう。

尚、本論は、第58回日本保育学会において、論文集・口頭にて発表したもの、及び第10回日本学校音楽教育実践学会において、口頭にて発表したものを合わせ加筆したものである。

参考文献

- 1) 小学校学習指導要領 文部科学省 1998, p.6 総則「開かれた学校づくりを進めるため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、小学校間や幼稚園、中学校、盲学校、聾学校及び養護学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒や高齢者などとの交流の機会を設けること(下線筆者)
- 2) 幼稚園教育要領 文部科学省 1998 p. 14 「幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体

- 的な生活態度などの基礎を培うようにすること(下線筆者)
- 3) 秋山和夫「幼児教育を考える22章」 北大路書房 1996
 - 4) 川村登喜子「子どもの共通理解を深める 幼稚園と小学校の連携」 学事出版 2001
 - 5) 秋田喜代美「幼小連携のカリキュラムづくりと実践例」 小学館 2002
 - 6) 山口健二「幼小連携にかかわる幼稚園・小学校教員の意見調査」 岡山大紀要 2003 p.70
 - 7) 門松良子「保育者養成において学生に『表現』をどのように指導するか」 日本保育学会第58回大会発表論文集, 2005 p. S48
 - 8) キース・スワンウィック 野波健彦, 石井信生, 吉富功修, 竹井成美, 長島真人 訳 「音楽と心と教育」 音楽之友社 1992
 - 9) D. J. ハーグリーブス 小林芳郎訳「音楽的成長と発達」 田研出版 1993
 - 10) 西原彰宏「保育心理学 子どもと発達」 東京書籍 1995
 - 11) 津守 真「保育の体験と思索」大日本図書 1980 p.11